

# ウォーキング & ハプニング

松平 忠志（応化会）

私は毎日1万歩を目安にウォーキングをしている。場所は、ほぼ3カ所で

- 花水川に沿った、平坦なサイクリングコース
- 平塚海岸の砂浜にある、少しばかり脚にはキツイ砂の道
- 標高は僅か150mほどだが、急傾斜のある高麗山のハイキングコース（登りはキツイ）

天候や体調や気分で、適宜、コースや距離を選んでいる。

時々思わぬハプニングがある。“犬も歩けば棒にあたる”の通りだ。大いに好奇心を刺激される事がある。ボケ防止にもなるだろう。話題を幾つかご披露したい。

## 1. ウミガメ

私が平塚に移り住んだ50年ほどの昔、平塚海岸は自然の砂丘が連なっていた。魚介類も豊富で、海岸には貝殻やホンダワラなどが打ち上げられていた。地元出身の従業員の中には、ハマグリ漁をサイドワークにしていた人もいた。

その後、浸食が進んでいつの間にか砂丘は完全に姿を消した。相模川に次々にダムが出来、土砂が供給されなくなったためとも言われている。

最近では、時々、重機が砂を運び込んだり、浸食された崖を修理するようになってしまった。狭い防風林と風蝕防止用の竹垣のベルト地帯に続いて、急傾斜の砂の崖を降りると、直ぐに狭い渚である。もはや完全な人工の海岸である。釣り人も散歩している人も僅かである。それでも竹垣の周りには自然のミドリがある。ハマユウ、ハマチシャ、ハマボウフウなどが群落を作っている。ハマチシャ（別名ツルナ）は戦中戦後の食糧難の時には、空腹を満たしてくれた貴重な野草だった。今も柔らかく大きな葉を広げているが、摘む人はいない。

大雨のあとには、川の上流から海に流れ出た大量のごみが、海岸に漂着するが、道路清掃車ならぬ砂浜清掃車が走り回って、たちまち見かけだけはキレイになる。年中機械でかき回されているのだから、渚の生物達にとっては、棲みにくいどころか、棲息は不可能だ。

そんな海岸にも嵐の後などには小魚などが打ち上げられている。体長50cmほどのエイやサメ、など、など……

カラスが群れているので、近寄って見たら、ウミガメの死骸があった。体長は1m近い立派なウミガメである。平塚海岸には偶に（2、3年に1匹）、アカウミガメが産卵に訪れるらしい。

噂では、時期になるとボランティアが巡回し、見つけると直ぐ卵を回収して孵化させ、放流しているらしい。

私にとっては野生のウミガメを見たのは初めてだった。死骸とは言え、立派なウミガメを散歩コースで見たのは驚きだった。平塚市立博物館にはウミガメの骨格標本があったのを思い出し、このまま腐らせるのには、しのびないと考えた。

しかし私のガラパゴス携帯では、博物館の電話番号を調べることはできない。

丁度そこへ、散歩中の女性が通りかかった。キャリアウーマンらしい人なので、スマートフォンは使いこなしているだろう。声をかけ、博物館の電話番号を調べて貰った。

直ぐに博物館の担当者とは連絡がとれたが、ウミガメの骨格標本は既にいくつもあるので、要りません、との連れない返事だった。

ところで件の女性いわく。「鼈甲(ベッコウ)が採れないですかねエ。」

転んでもただでは起きないスゴイ人だと、感心するやら、驚くやらだった。

この話を何人かにしたら、「女は誰でも鼈甲を連想し、何とか手に入れたいと思うのは当然だ。」と言う反応だった。女性恐るべしだ。

翌日にはウミガメは無くなっていた。キャリアウーマンが、パートナーかボーイフレンドを連れてきて、持ち帰ったのだろう。(死骸の写真は遠慮する。)

ついでに・・・シャコガイの話題

この砂浜でシャコガイの貝殻を見つけた。熱帯から亜熱帯のサンゴ礁の浅海に棲息する大型の二枚貝である。藻類が共生し、生活に必要な栄養素の多くを褐虫藻の光合成に依存している。2枚の貝殻は開いたままか、少し動く程度で、閉じることはできない。・・・ウィキペディア

30cmほどの大きさで、あまりにも重いので草むらに隠しておいたが、翌日には無くなっていた。

サンゴ礁に棲息する貝が、相模湾に棲みつくとはいえない。今のところ調べるチャンスがない。

「沖縄旅行の土産にでも買ったのに、邪魔になって捨てたのかなあ。」と言ったら、娘は、旅行の土産を捨てることはないよ。」と言う。謎のままだ。



## 2. 花水川の桜並木の“ヨコヅナサシガメ(横綱サシガメ)”

丹沢の南、秦野盆地の雨を集めて相模湾にそそぐのが金目川であり、その河口部分だけを花水川という。

昔は氾濫を繰り返す暴れ川だったが、今は川幅が非常に広げられ、深く掘り下げられているので氾濫はなくなり、ミズトリ達の楽園になっている。バードウォッチングの有名なスポットになっているらしい。

私はカワセミの姿を見かけると、“今日はラッキーな日だ。”と思う程度の関心しかないが、たまたま声をかけたカワセミウォッチャーの話に驚いたことがある。

丁度カワセミのヒナが巣離れした直後だったが、朝の暗いうちからウォッチャーが何人も集まり、観察、撮影は大成功だったそうだ。雌雄のつがいが3個の巣穴で6匹のヒナを育てていたそうで、無事に6匹とも巣立ったとのことだった。

私は親鳥が巣穴を出たり入ったりするのは見たことはあるが、それでも十分に満足だった。

ヒナの巣立ちの日を、何故予想できるのかは不思議だが、詳しいことは聞かなかった。

1年ほど前、巣穴があった斜面はコンクリート護岸になってしまった。

ところで川岸には“桜並木”がある。樹齢5、60年で黒い幹は風格がある。この幹に“毒々しい真っ赤なムシ”を見つけた。体長は1cm強で、小さい虫だが、昆虫少年だった私は大いに興味をそそられた。こんな毒々しい色の虫は、今まで見たことがなかった。

周囲にはカメムシらしき虫が数匹いた。

ネットで調べたら、直ぐに「ヨコヅナサシガメ」だと判った。脱皮直後は鮮血のような毒々しい色であり、しばらくすると、成虫本来のマダラ模様になるのだ。

脱皮直後のセミが白いのと同じ現象とのことだった。無防備な時期を乗り越えるための警戒色だろう。

アオ虫や毛虫の体液を吸う動物食の虫であり、刺されると激痛になるという。かなり危険な虫だった。

写真の「カメムシらしい虫」、は“ヨコヅナサシガメ”の成熟成虫であった。

私にとっては、結構なハプニングだった。





### 3. 高麗(コウライ)神社のカワズ合戦

この神社は高麗山(コマヤマ)の麓にある。高麗山は小さい山だが、歌川広重の浮世絵 東海道五十三次の内の“平塚縄手道”に描かれていることで有名である。全山緑に覆われ、見る位置によっては、キレイな左右対称形であり、平塚市のシンボルのような山である。南斜面は自然林で、神奈川県「天然記念物」として文化財指定されている。

所で668年、高句麗が滅亡すると、王族の一人、高麗若光は海を渡って大磯に上陸し、この地の開拓に当たったという。(後に武蔵の國、今の埼玉県 高麗郡の郡長に任ぜられた。)

高麗(コマ、コウライ)は高句麗に由来する名前である。

さて私は「ヒキガエルが地震を予知する」との仮説にこだわっている。

というのは、2011.3.11の東日本大震災の当日の午前中に、たまたま高麗神社に立ち寄り、境内の池で大規模なカワズ合戦(ヒキガエルの繁殖活動)を見たのだ。ヒキガエルが神社の境内をわがもの顔に歩き回り、小さな池はカエルだらけだった。繁殖期のオスは、メスだけでなく、オスの上にも抱きつく。丸いものなら、板きれの上にも抱きつく。

以前にも見たことはあるが、これほど大規模なカワズ合戦は見たことがなかった。

そしてその直後に東日本大地震が起きたのだ。

地震の前の小動物の異常行動は、良く聞く話である。しかし因果関係を証明することはむずかしく、単なる小話として消えて行くのだろう。

だが自分が体験して見ると、あまりにも強烈な印象のため、どうしても無視することが出来ない。以後は毎年、3月になると、その小さな池を観察している。

以降、年々数はどんどん減っている。今年は10匹程度で、5年前の10分の1以下だろう。

産卵日は3.11前後1週間程度の変動だが、今年は2週間ほど早かった。特に暖冬だったようだ。

結論を先に言えば、2011年の大規模な繁殖行動の原因は、以下の2つだろう。

- 直近の1、2年に大発生した。生育環境の良い年があった。
- 以降は、小規模宅地開発などで、環境が悪くなり、急速に絶滅に向かっている。



2011年に地震を予知して沢山集まったとか、その年は水溜りが少なくて、この神社の池に集まったというシナリオは無理があるだろう。事実としても証明は不可能だ。

また、2011年以前には観察していないので、データとしても全く不完全だ。

ヒキガエルは、丘陵などの乾いた土地に適応すべく進化した種だそうで、小さな水溜りにも産卵する。干上がる前にオタマジャクシからカエルに変態していなければならない。

そこでオタマジャクシの状態の期間が非常に短かく進化した。産卵から1カ月後にはオタマジャクシ。更に1カ月たてばカエルに変態して上陸する。この間、大きくなっているようには見えない。

孵化したオタマジャクシは直ぐに尾が短くなり、後ろ足、前足が出て、体長7、8mmの子ガエルになる。その小さな子ガエルは密集して上陸する。

オスは1年後には成熟して繁殖行動に参加できるが、メスは2年かかるらしい。以後、5、6年は繁殖行動に参加するという。成熟したヒキガエルの体長は10cmはあるので、ほぼ半年で体重が数千倍に増えることになる。それほど大きく成長することのできた個体だけが繁殖行動(カワズ合戦)に参加する権利がある。

最初の1年間の生存率はほぼ1000分の1だろう。

生育環境が良い年で、もし生存率が100分の1ならば、参加者が10倍になるはずだ。そんな年もあるだろう。

実は生存競争は、この小さな池の中でも、既に始まっている。

毎年、オタマジャクシの時期になると、小さな蛇“ジムグリ”が数匹、集まって来る。このヘビは小さくて、目立たない、おとなしい蛇と言われているが、小さなカエルにとっては恐ろしい天敵だ。オタマジャクシも、密集して上陸中の子ガエルも、“ジムグリ”にとっては、お誂え向きのサイズの餌なのだ。

餌の方はまさに蛇の前のカエル。立ちすくんでいるのか、逃げようとしなない。

蛇の方は小さいながらも鎌首をもたげたと見ると、パクリと飲み込む。

水に潜ってオタマジャクシを襲う蛇もいる。なかなか獰猛な蛇である。



小さな池の中でも、弱肉強食のドラマが展開されているのだ。(2016.7.18)